

「標題」から『平番得勝図巻』を読む

陳 履 生

一、『平番得勝図巻』の流布と概況

『平番得勝図巻』（明代、作者不詳）は、万曆三年前後、明政府が陝西・甘肅・寧夏などの地域で、「番族」の騷擾を鎮圧する様子を描いた歴史絵巻である。図巻は、『明史』および関連地域の地方志の記載内容を実際に描き出し、出兵から戦闘・賞功にいたるまでの全プロセスを生きた表現している。氣宇壮大で、構造が複雑でありながら鮮明なイメージを抱かせる。中国絵画史上、非常に得がたい、戦争をテーマとした優れた作品であり、同じ明代の「抗倭図巻」と並んで、中国絵画史を研究する上で、必要不可欠な、重要な作品である。この作品から明代絵画と社会政治との関連性や、その社会的機能と、明代における戦功の記録と事実の記録の作成手法をうかがうことができる。

元北洋政府代理国務総理で、中国营造学社の社長であった朱啓鈴⁽²⁾が、一九三一年に『平番得勝図巻』に付した跋によれば、一九三〇年の暮、張新梧⁽³⁾というコレクターが「巻物一本を持参して見せ、旧家のものの一つだという」「前欠で、題字も跋もない」「初めはその由来を詳しく知らなかった。新梧が次々と犀の角やら鼈甲の切れなどを持ってきて、これらも同じ人から得たものだという。私はこれを不審に思い、その出所を尋ねようと決意したところ、李岐陽王家から持ち出されたと知った。新梧を介して末裔の国寿兄弟らと知り合い、代々伝わってきた文物を尽く窺うことができた。この図巻は実にそのなかで一番大事なものであつ

た」、そこで「従弟の瞿兌之に詳しく考証するよう依頼」したという。一九三二年一月一日、瞿宣穎⁽⁴⁾（兌之）は、図巻の考証を終え、あわせて北平補書堂の自宅で題記を書いた。

このような事情に加え、朱啓鈴が創設した北平古物陳列所が、のちに故宮博物院に合併されたことも考え併せると、故宮印刷所が一九三二年にコロタイプで精製印刷した『岐陽世家文物図像冊』（三七cm×二六・三cm）の作成に朱啓鈴が助力したことは、極めてありそうなことである。この図録には、『平番得勝図巻』が収録されており、これが『平番得勝図巻』が公開されたはじめである。さらに、中国营造学社によって編集された『岐陽世家文物考述』が一九三二年五月に刊行され、なかに朱啓鈴の「平番得勝図跋」、瞿宣穎の「平番得勝図考」が掲載された。この「跋」と「考」は、図巻中の跋語と、文字の異同が少しあるだけで、基本的に同じである。

推測になるがもとと岐陽王李文忠⁽⁵⁾の「裔孫」である「国寿兄弟」、あるいはコレクターであった張新梧が所有していたこれら世家（名門）の文物は、朱啓鈴に「尽く窺われた」後に、ことごとく朱啓鈴のコレクションとなったものであろう。というのは、一九五〇年、朱は自分の大事にしてきた明岐陽王世家文物五六点を故宮博物院に寄贈し、文化部は褒状を発行してこれを表彰しているからである。一九五六年、当該図巻は故宮博物院から中国歴史博物館（現・中国国家博物館）に移管された。

『平番得勝図巻』は現在二段に分けられ、絹本着色である。瞿宣穎「平

「番得勝図考」の記述によると、縦は一尺三寸五分、横は二丈一尺であるが、現在館で測ったところでは、縦四三・八センチ、横九七二・二センチである。画面には作者名も印鑑もない。二段の間の空白に「野雲過眼」の印章があり、図巻の末尾に収蔵印が二つ押されている。引首に徐世昌⁽⁶⁾による「岐陽世沢」の題があり、最後に朱啓鈴・瞿宣穎による二編の跋が付せられる。図巻の完成から朱啓鈴が見るまで約三百余年、この間の伝来状況について語る文字資料は一切ない。誰が誰に依頼されて、何のために作成して、何故、そしていつ岐陽王の末裔の家に入ったのか、すべてが謎に包まれている。

同時代の歴史画と異なり、『平番得勝図巻』の画面には非常に目立つ二七の標題がある。これらの標題の位置は画面の内容によって違い、長さも異なるが、絵の解説のためにもっとも直接的な根拠を提供してくれる。これらの標題を通して、画が表現しようとした歴史的な内容がわかり、絵自体の歴史的価値を深く認識でき、題字や跋がないという欠陥を補うことができる。

二、標題の由来と役割

一般に、「標題」は漢代の絵画（画像磚を含む）に比較的多く見られ、青銅器の銘文、陶器の表面にある記述的な文字と直接的なつながりがある（図1）。特に形式的には春秋時代の「平鐘」⁽⁹⁾にある銘文を囲む長方形の枠とも直接関連している（図2）。絵画にある標題は、通常、描かれた人物あるいは起きた事件を表示するために、人物の名や事件の内容をかたわらに書く。標準的なスタイルは、長方形の枠のなかに、刻まれた、あるいは描かれた人物の名や事件の内容を書き込むのであるが、画面の余白に直接刻んだり書いたりして、長方形の枠が無いものもあった。漢代の絵画は、客観的にみて、「教化を成し、人倫を助ける」社会



図1



図2

的機能を果たさねばならない面があった。それゆえ「悪をもって世の人を戒め、善をもって後人に示す」⁽¹⁰⁾という漢代の社会的なしきたりのなかで、漢宣帝（紀元前七四年～前四八年）の時、霍光など一人の功臣の像が未央宮中の麒麟閣に刻まれ、彼らの功績が讃えられた。漢明帝の永平年間（五八～七五年）、明帝は父に追隨し、後漢の政權を築いた功勞者を追憶するために、功臣二八人の画像を洛陽南宮の雲台に描かせた。これは古くから「雲台二十八將」と称される。すなわち書物にいうところの「忠や孝を尽くした人はすべて雲台にあり、業績や功勞がある人はみな麒麟閣に登る」、「善をみれば悪を戒め、悪をみれば賢を思う。その容姿を留めて、盛徳を明らかにし、その成敗を書いて、既往の道を伝える」ものである⁽¹¹⁾。現存作品からみれば、漢代絵画は、描かれた功臣の中から、ひとりひとり具体的な人物を識別できるような水準には達していなかったから、標題によって絵の不足を補ったのである。これが後に「絵の不足を題字で発揚させる」といわれる早期の状況であった⁽¹²⁾。早期の題は絵の形を補足するためのものであったが、宋代以降の題は絵の意味を高め

るためのものとなった。

識別という角度から標題の存在価値をみよう。現存の漢武梁祠画像の中にみられる、「韓王」「処王」「齊王」「摂政」「王慶忌」「使君」「楚昭貞姜」などの標題は、すべて人に識別させることを目的としている。これは見る人のためであり、事跡の流布のためでもあった。標題がもつ、このような明確で功利的な目的は、漢代の絵画に、鮮明な特徴を伴う二種類のスタイルを出現させた。一つは、具体的に人物をさすこと、あるいは特別に説明が必要とされる画像で、その画面中にはみな標題が書き込まれている。たとえば「倉廩図」¹⁴の標題「量穀」がその例である。また「建初八年張文思画像石」¹⁴には、人物・事柄のほかに年を記した標題が多くみられる。もう一つは、圧倒的多数を占めるのであるが、基本的に標題がまったく無いものである。同じ墓室、同地域にこのような二種類の画像が存在しており、標題のないものは明らかに識別の必要性がないものであった。たとえば一目でわかる、人首蛇尾の「伏羲」「女娲」の画像、あるいは車や馬で外出するさまを表現したものや力士・下僕の画像などである。四川で出土した豊富な主題をもつ、構図も通常の画像石より複雑な画像磚でも、たとえば塩井・厨房などには標題がない。もちろん地域によって状況は異なる。現時点での出土品からみれば、標題のある画像石の大半は、山東と江蘇に集中している。

後漢から魏・晋の時期には、孝子に題材を取った絵画が流行した。こうした絵画は、具体的な人物や、人物に関係する物語の内容を示す必要があるから、通常「彩篋絵孝子故事図」¹⁵のように、主人公の名を明記した標題がある。北魏の「屏風漆画列女古賢図」¹⁶には上下四層に烈女・孝子・高人・逸士を描き、すべての画面の内容を、標題や題字によって説明している。これは標題という手法が、北魏において広範に用いられていたことを表している。一方、標題と題字が同時に画面にあったことは、

両者が共存する時期があったことをものがたり、過渡期における題字の初期のスタイルを示すものであった。特筆すべきなのは『平番図巻』と同じ固原にあった北魏の「漆棺彩画」¹⁷であり(図3)、その画面中に示される、標題の標準的なスタイルは、固原地域の絵画の伝統を現している。

ほかに比較的有名なものに、北魏の「石棺線刻孝子図」¹⁸が挙げられる。ここに刻まれた孝子の物語には、すべて標題がある。たとえば「子舜」「子郭巨」「孝孫元谷」等のようなものである。

漢代から形成されてきた標題というスタイルは、南朝の「竹林七賢と榮啓期」¹⁹という型によってつくられた磚画にいたると、新しい形が出現した。標題というスタイルが変化し、題字へ変わる過程を表現することで、この作品は尋常ならざる意義を持つている。画面中には、七賢と榮啓期の一人一人のそばに名を記した標題があり、長方形の枠がないから、標題はそれほど目立たず、文字が自然に画面に溶け込んでいるかのようにある。このような過渡期のスタイルをあらわすもつとも代表的なものは晋・顧愷之の「女史箴図」²⁰である(次頁図4)。現存する九段のうち、余白に文字数がそれぞれ違う箴言が書かれ、長いものは四行にも

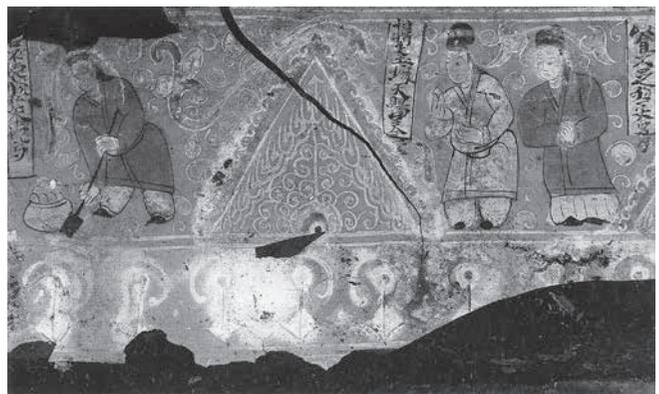


図3



図5



図4

亘っている。これらは漢代の標題とは違い、後世の題字とも異なる。現存する敦煌壁画のうち、北魏から隋・唐までのものには、標題が見られる。これは通常供養をささげるために、供養人の氏名を書いたものであった。たとえば北魏二五七窟の「沙弥守戒自殺故事」などがそうである(図5)。また、唐三二三窟の「漢武帝跪拜金仏」のように、標題によって事件を説明したものや、西魏二八五窟の「説法図」のように、供養人の氏名を記す一行の標題のほか、事件を記述する数行の標題をもつものもあった。総じて、漢代の絵画で標題がみられるものの規則性を探ると、真実性のあることを描くとき、あるいは具体的な人物や言い伝えを描くとき、識別あるいは解説の便宜上、標題をつけていることがうかがえる。唐代以降、絵画の社会的機能が弱くなり、美意識がこれまでになく高まった。巻軸装の絵画が主流となり、詩・書・画の一体化が絵画のオリジナリティーを強め、標題に代えて題字を用いる方式によつ

て、画面がより完全なものになった。境地や気品を強調する絵画スタイルは標題の存在を受けいれなかった。一方、事実を記録する絵画では、題字によって内容を述べることであった。更に重要な点は、標題から生まれ変わった題字が、文人画の表現手法の一つとなり、画面の意匠を妨げないようにしながら、絵画における重要な要素になったことである。これゆえに、宋代以降の絵画において、巻軸装の作品には標題がほとんど見られなくなった。標題の出現から題字に淘汰されるまでの過程は、中国絵画における純粹な美意識の表現が育まれる発展プロセスでもあった。人物・山水・花鳥がそれぞれ独立して成熟していくばかりでなく、詩・書・画の一体化が中国絵画の美意識の特徴にもなった。しかし、明代に至って、『平番得勝図卷』が珍しい先祖がえりの現象を示した。画面の意匠を壊す標題を用いて、平番の戦いに参加した将校の名や、番族名・地名を記しており、元・明・清代以来の巻軸装の絵画のスタイルとは大いに異なっている(図6)。これは、戦功の褒賞という作成目的からの選択であったろう。その目的を実現するために、将校の名を一々標題で示し、その功績を強調しなければならなかった。このような絵画の効果を



図6

犠牲にしてしまう表現手法は、作品において、芸術と功利の矛盾が発生した場合、美意識が二の次にされてしまうことを物語っている。これが画面には絵師の名が現われない原因でもあろう。

三、『平番得勝図巻』に描かれた「平番」の年代

『平番得勝図巻』の作成年代、および描かれた事件の年代について、画面には明確な文字による記述はない。しかし標題が示す人物と事柄は、絵画が表現しようとした内容の年代考証のために重要な示唆を与えている。標題に基づいて、瞿宣穎は「図に列せられた人物のうち、もっとも重要なのは固原兵備道劉伯燮と陝西総兵官孫国臣である。この二人は当時将校として前線に赴いた者であった。彼らの履歴がわかれば、この図と李氏との関連も知りうるであろう」と述べた。瞿宣穎の判断は正しいといえるべきである。これは作品の作成理由と依頼主の解明にも、つながることである。

瞿宣穎は考証において、次の根拠を提示した。以下、逐一コメントをつけていこう。

『雍正隴西県志』巻五によると、劉伯燮は湖北孝感の人、進士出身で、明代において隴右道の守備を担当した。また『光緒固原州志』巻五二によれば、孫国臣は大同の人で、固原の右副総兵であった。右の二人の在任期間をもって当時の軍事状況を推定すれば、事件は万暦三年に起きたことがわかる。

『雍正隴西県志』と『光緒固原州志』には、劉伯燮と孫国臣の在任期間は、万暦三年とは明記されていない。また孫国臣が「固原右副総兵」であるという点は、「陝西総兵官」という標題と合致しない。

『康熙鞏昌府志』巻三によると、万暦三年夏四月、番族の扎力啞(音はザーリザ)は階州を犯して守備範延武をとらえた。四年春二月、

分守参議劉伯燮と副総兵孫国臣は出兵し、ザーリザを誅殺した。

明初以来、いわゆる番族による騷擾は絶えなかった。そのため『康熙鞏昌府志』だけでも多くの関連記事がある。たとえば巻三には、「成化四年、洮・岷辺備を置き」「番戎を防ぎ、制圧しようとした」、「八年春、全陝巡撫を設け、以って、官吏の査察・民衆の撫育・食糧の備蓄の督促・番族の首領の制圧をさせることにした。右都御使の羅汝敬をこれにあてた」、「(武宗(正徳))一五年八月、西固の番族が階・成地方を侵犯した。総制尚書王瓊⁽²²⁾は鎮守文を遣わし、軍を率いて攻撃させた。八族を撃破し、降伏を受けて帰還した」とある。以上からわかるように、史書に記載されているものは、必ずしも図中に描かれた事件ではない。また図巻に描かれていることと関連する「参議劉伯燮・副総兵孫国臣が軍隊を率いて攻撃」した事件は、万暦「四年春二月」であり、万暦三年の出来事ではない。

『光緒甘肅新通志』巻四六によると、万暦三年の秋、西羌部族の賊が洮州を侵略した。西羌の扎着他(ザージタ)等が洮州を侵犯したのである。総兵孫国臣は旧洮州から討伐に向かい、推官劉希稷⁽²³⁾は軍を督して西羌を大破し、二〇〇余人の首を切り、夷族の什器・車両などを三千以上捕獲した。

これは関連する各種地方志の一文であるが、「総兵孫国臣が旧洮州から討伐に向かい」、「推官劉希稷が軍隊を督し」たことは、画には反映されていない。よって、描かれているのは万暦三年の秋、西羌が洮州を侵犯した事件ではないことがわかる。

『明史・西域伝』によると、「はじめ、洮州の番族が、河州の奸民に金品をだまし取られたので、内地に入って略奪した。他の番族もこれを機に騷擾を起こした…これによって二將の間に隔たりが生じた。総督である石茂華はこれを聞いて、右の二人及び蘭州参將の徐

勲・岷州守備の朱憲・旧洮州守備の史経に命じてそれぞれ軍隊を引率して番族の部落に赴かせ、利害を問かせた。…茂華は所轄の軍を招集し、分けて討伐に赴かせた。四〇余人の首を切り、焼死者は九〇〇余人、家畜数十群を捕獲した。番族の各部族は震えおののいて、遠くへ移動した。降伏してきたのは七一族で、反逆の首謀者四人の首を切り、二人を捕虜として献上し、馬・牛・羊あわせて二六〇頭を運んできて、稽首して謝罪し、再犯しないと誓った。そこで軍隊は帰還した。右のことは『西域伝』において万暦二年の冬後に記されている。さらに『考兵志』には「万暦三年、陝西の番族平定の戦勲を讃える事があつた、成化年間の先例を見よ」云々とあり、これで右の事は実際万暦三年に起きたことだとわかる。

画の内容に関連する重要な事件が「万暦二年の冬後に記されている」のは、事件自体が万暦三年だという意味にならない。万暦二年の冬、万暦三年あるいは万暦三年以降の可能性もありうる。『明史・西域伝』では、万暦二年のあとは「八年春」と続けられ、言及されているのは「二年冬、丙兔に甘肅における取引を許可し」、「丙兔が青海にとどまって」以来の事件である。

最後に、瞿宣穎は「右に並べた根拠により、図中に列するところの劉伯燮・孫国臣という二人の主将が、実際にこの戦を指揮したことがわかる。『明史』にはこれら二人の名前は出てこないが、徐勲の名は、画面に合致している。したがって、この図は万暦三・四年の間に洮州で起こった事実を書いたものだとって間違ひなからう」と結論づけた。描かれた戦の時間を「万暦三・四年の間」としたのは明らかに「万暦三年」とするより正しい。しかしなお議論の余地がある。

実をいえば、標題に示され、瞿宣穎から「最も重要な者」と見られた「固原兵備道劉伯燮」は『平番紀事』²⁴という著書を残している。これは

当事者による記述であり、『中国野史集成』第二五冊にも収録されている。劉伯燮はこの書で、平番の一部始末を詳細に記録した。標題に現れた一六人のうち九人までが記載され、事件の起きた年月日、及び戦闘の具体的な経過まで詳細に記述されている。「万暦甲戌の春、毅庵石恭襄公茂華が命を受けて総督として陝西へ来て」から、規模の大小はありながら、戦は絶えなかった。最も主要な戦が集中していたのは万暦三年の八・九月の間である。劉伯燮の記述は『平番得勝図巻』に描かれた内容と一致しており、しかも非常に具体的で、撃破された番族も標題と合致している。今回の平番は、丙子正月二六日まで行われ、劉伯燮はやつと凱旋した。しかし六月二六日に至って、哨兵は「番族が出没している」と報告してきた。参将趙憲副と游撃師範が中軍百戸を率いて攻撃しに行き、四〇人の首を切った。この後、山峒峪・駱駝壩・麦纏坪・二王家山・文泉の四部族と、撃滅されなかった栗子莊など一五部族が次から次へと降伏してきた。劉伯燮の『平番紀事』はここで終わりを告げる。以上からわかるように、描かれた事件の年代は当事者劉伯燮の『平番紀事』にある「甲戌の冬より丙子の冬まで」を基準とすべきである。すなわち、『平番得勝図巻』に描かれたのは万暦二年（甲戌、一五七四）から万暦四年（丙子、一五七六）にわたる平番のことで、これはひとつの継続的な事件であり、まとまったプロセスをもつものであった。

四、『平番得勝図巻』が二段に分割されたことについて

同時期の明代絵画と比べると、『平番得勝図巻』が一卷でありながら、二段に分けられているのは、慣例に合わないことである。たとえば『抗倭図巻』は、倭寇襲来・放火と略奪・難民の避難・水上の戦闘・勝利の凱旋・城からの凱旋兵の出迎えを表現し、因果関係と前後の順番がわかる、連続性を持った作品である。しかし『平番得勝図巻』は、「賞功」

だけが独立した画面として設けられている。一巻として装潢されているにもかかわらず、間に空白が置かれて相互に隔てられ、互いに独立しているのである

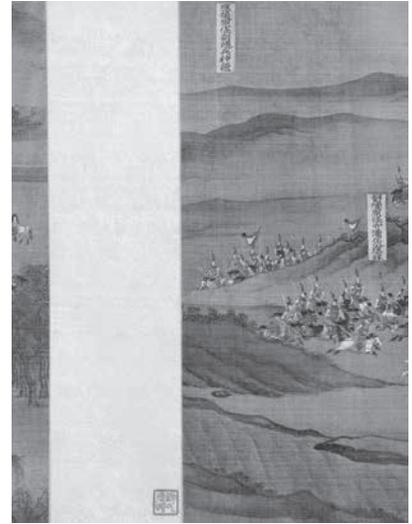


図7

(図7)。これにより見る者に、客観的にみて完成したものではないと感じさせ、不思議に思わせるところがある。特に両画面の関係や、間のつながりが非常に唐突である。図巻の標題の規則性から見て行こう。およそ画面の上部に標題が現れば、それに対応する下部にこれに関連する事柄が描かれている。前段にある合計九つの標題のうち、八個目まですべてこのようである。

- 一 軍門固原発兵
- 二 固原兵備劉伯燮督兵
- 三 陝西総兵官孫国臣統兵
- 四 蘭州参将董大衆攻破
- 五 原任参将朱清攻破
- 六 固原游撃李東陽
- 七 総兵大营
- 八 署参将都司楊繼芳攻破

最後の標題「応援原任副総兵種繼」は画面左側の終わりに近い位置にある。そのすぐ右側の画面上部では、「督陣原任守備張応祥」が一小隊

を率いて左下の方向へ坂を下りて、画面末尾に向かっており、画面下部では、「原任守備蔣松」の一小隊が右に向かって進み、ちょうど番族と向かって戦わんとしている。この二小队の人馬は所屬が明らかで、標題にも合っている。では「応援原任副総兵種繼」の兵卒や馬はどこにあるのだろうか。明らかに図巻の左側は一部を欠いており、そのため「応援原任副総兵種繼」は、標題のみがあつて兵卒と馬がないのである。

これは見る者に、黄公望の「富春山居図」が二つに分割されたことを連想させる。黄公望及びその「富春山居図」があまりにも有名であったため、一巻が分かれて二つになってしまったことは、多くの物語に語られており、広く知られている。二つにされたことによりさらに価値が高まったらしい。しかし、描かれた内容は明代史における重大な歴史的事件であったにもかかわらず、作者名もなく、印鑑もなく、名高くない『平番得勝図巻』は書画の関連書籍にも言及されてこなかった。この点では『抗倭図巻』も同様である。それゆえ最初にこの図巻を発見し、これについて跋を書いた朱啓鈴・瞿宣穎もこの問題に気づかなかつた。

画面の冒頭からみれば(図8)、作者は主題に関連する表現について熟考を重ねたことがわかる。中にある多くのバックグランド的な描写は



図8

西部辺境の地理的な特徴を示し、「平番」を広大な空間で行えるようにさせ、「平番」の功績の偉大さを表そうとしている。最初の部分では、「東岳廟」から固原の町までの様子によって「出兵」という主題を打ち出した。真ん中の部分では、「白化嶺」から「旧洮州」の間にわたる広大な空間と山川の起伏とが、城と互いに引き立てあい、進軍の困難さを表明している。大人数の軍隊が出征していくのは、明朝官軍の意気込みを表し、必勝の自信を見せ、同時にこの後の具体的な「平番」の場面を作り出す伏線ともなっている。このような明確な構成と表現様式のもと、「応援原任副総兵種繼」に至って、士卒や馬もなく、突然終了したのは、明らかに全体の雰囲気合わない(図9)。



図9

さらに、「賞功」という段の始まりからみると、それまでと違って、いきなり將軍のいる高台が現れ、非常にぎこちない(図10)。

のは、画面が繋がっていない。図巻は、出兵・進軍・平番・賞功という完全な過程が出揃い、一気呵成なものになった。それは同じ種類の主題をもつ中国の伝統絵画における基本的な表現手法に合うものである。

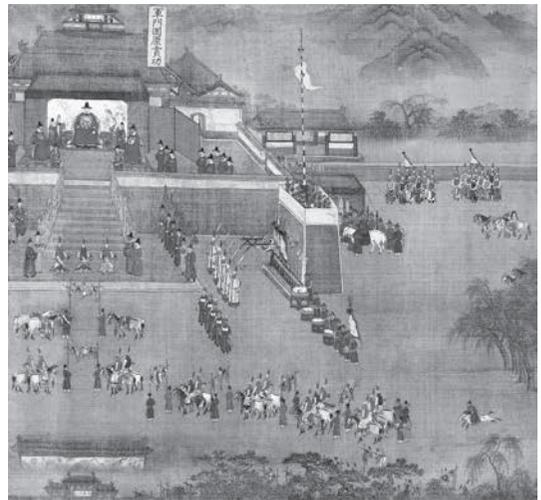


図10

これもそも繋がって

いた部分だが、何故なくなったのかについては、もちろん数限りなく推測することはできる。しかし所詮推測の域を出ない。一つ想像できる

朱啓鈴に頼まれて「詳らかにこれを考証」した瞿宣穎は、「平番得勝図巻」について詳細な研究をした最初の学者であった。一九三二年に執筆した跋で、瞿宣穎は画面全体を下記のとおり一二段に分けた。

五、『平番得勝図巻』の段落

- 一 軍門固原発兵
- 二 固原兵備劉伯燮督兵
- 三 陝西総兵官孫国臣統兵
- 四 向導指揮楊臻
- 五 原任守備苗永恩、蘭州參將董大衆攻破
- 六 原任都司張九功、原任參將朱清攻破
- 七 固原游擊李東陽

八 原任参将徐勲攻破、固原游撃陳守義攻破、

九 総兵大營

一〇 署参将都司楊繼芳攻破

一一 督陣原任守備張応祥、原任守備蔣松、応援原任副総兵種繼

一二 軍門固原賞功

瞿宣穎の段落わけは基本的に標題の内容、つまり人物と事柄を根拠としたものであり、画面の構成を無視した面は否めない。だからこのわけ方は、画面自体の構成と矛盾しているところがある。これは明らかに氏の研究手法、あるいはその鑑賞法にかかわるものである。古代の巻物を一段ずつ鑑賞するやり方では、全体的な認識を得がたいのは事実である。氏の跋をみればわかるように、各段落は、詳細だったり簡略だったりしている。前のほうが詳細で、後ろのほうが簡略であり、全体的なバランスが取れていない。

瞿宣穎の段落わけによると、前の四段が画面の大半を占めている。この大半の画面においては、固原城から行軍に至るまで、町の変化はあるが、画面全体はほぼ同じムードであり「白化嶺」以外はほとんど変化がないといつてよい。画面のなかで最も重要なのは「平番」の戦場で、これは「平番」の具体的ですばらしい表現である。「平番」の部分では画面の変化が多く、描き方もすばらしい。しかし画面に占める割合はそれほど多くない。常識的には、画面に占める割合は、その重要性を判断される大事な指標である。

画面全体を主題別に分けるなら、大きく四段―出兵・進軍・平番・賞功―となるだろう。具体的な位置は下記のとおりである。

- 一 出兵・冒頭から隆徳県と静寧州の間まで
- 二 進軍・静寧州より「白化嶺」を過ぎて、旧洮州まで
- 三 平番・旧洮州より「応援原任副総兵種繼」まで

四 賞功・図巻の分割された部分

画面の全体を表現上の特徴から分けるならば、大きく五段―固原発兵・進軍途中・路過城池・平番得勝・軍門賞功となるだろう(次頁図11)。具体的な位置は下記のとおりである。

- 一 固原発兵・冒頭から隆徳県と静寧州の間まで
- 二 進軍途中・静寧州から「白化嶺」を過ぎるまで
- 三 路過城池・「白化嶺」から旧洮州に至るまで
- 四 平番得勝・旧洮州から「応援原任副総兵種繼」まで
- 五 軍門賞功・図巻の分割された部分

六、「平番得勝図巻」の内容

「平番得勝図巻」にある標題は、明確な目的を持っている。すなわち、作者が描こうとした内容を表すことであり、平番の戦場に参加した一人の將校―軍門(石茂華)・固原兵備劉伯燮・陝西総兵官孫国臣・嚮導指揮楊臻・原任守備苗永恩・蘭州参将董大衆・原任都司張九功・原任参将朱清・固原游撃李東陽・原任参将徐勲・固原游撃陳守義・署参将都司楊繼芳・操守洪恩・原任守備蔣松・原任守備張応祥・原任副総兵種繼―を明確に記して、それぞれの業績を注記している。すなわち「出兵」「統兵」、あるいは「攻破」「賞功」などである。一部の者については業績を明記せず、参加したことを示すにとどまっている。さらにシンボルとなる建築・山、あるいは橋の名の注記によって、描かれた場所を示している。たとえば「東岳廟」²⁵「白化嶺」「野狐橋」などがそうである。番族の名、たとえば「失刺(スーラ)族」「参多(サンド)族」「巴舍哈(バーシェハ)族」「札杓他(サーゾタ)族」「洛卜(ロボ)族」「官洛(グァンロ)族」なども明記している。

劉伯燮の『平番紀事』を紐解けば、画面の内容を大体把握することが



固原発兵



進軍途中



路過城池



平番得勝



軍門賞功

図11 平番得勝図巻全図

できる。同じ時期の『抗倭図巻』では、倭寇の襲来と略奪をもって抗倭の理由を説明した。それと違って、この図巻の冒頭では、『抗倭図巻』のように、『平番紀事』の冒頭の内容、すなわち番族の騷擾がもたらした損害を描かなかつた。「陝西では固原州に設けられた鎮守府があり、延・寧・甘・固四鎮の軍事を総括した。これは弘治年間から始まったもので、虜を退治するためのものだ⁽²⁶⁾という」。「嘉靖以来、番族が跳梁し続けたが、結局のところ、虜のように制御できないほど剽悍ではなく、時に随い臨機応変に鎮圧できた。隆慶・万暦年間には、北虜とは仲良く付き合ひ、無事だといわれ、辺境ののろし台からのろしがあつたことはなかった。しかし番族がしばしば出沒し、人や家畜をさらっていくようになった。今まで平和だったところからこのような警報がもたらされ、人々はいへん驚いた。数百年來その地域で生活し、集落を作ってきたものだから

ら、番族も実は大変強くなり、虜の盛んなときと同じ位である。「洮州・階州は東西に隔たつて、間に六〇〇里の距離があり、階州から南東の文県まで一五〇里以上ある。みな番族の住む地域である。階州・文県に在るのは武都羌であり、洮州に在るのは吐谷渾羌である。すべて禹の時代の北三苗の後裔である」。

万暦二年の春、石茂華が「命を受けて陝西の総督になる」までの間、一方では「作物の稔りは悪く、窮乏久しく」、一方では「二〇〇余年の間、官兵はその險しい巢窟まで討伐しにいけず、たまに討伐しに出かけた兵も簡単にくじかれてしまった」。さらにかつては「階州の番族は三年に一回、進貢」していたが、「文県の番族は、最近進貢しない」うえ、互いに結託している。しかし現地の「將校は凡庸な怖がり屋で知らん顔をし、ずっと軍隊に配分された食糧をひそかにピンはねして自分の懐に入れてきた」。それで「兵の食糧も給金も日に日に少なくなり、兵もだんだん数が減った。城砦も守る人がおらず、番族の動きはますますさかんなになった。略奪に出てこない日がないくらいである。現地の住民ははなはだしくその危害を受け、收拾がつかないほどであった」。さらに「河州參將が管轄するはずの二四の関所の間は、道のりが長いいため、管理が及ばず、時間がたつにつれて弊害も生じた」。諸番族と各集落の民は「その手下を引率して(劉)大経と常相巴の牛や家畜を奪い、人を殺して、長い間の恨みを晴らそうとした。彼らは忌み憚ることがなく、防衛の官軍もこれをコントロールできなかつたので、洮州の番族は盛んになっていくばかりであった」。上記の内容からわかるように、騷擾は「洮番」より始まった。これにより、『平番得勝図巻』の画面には、洮州と旧洮州が描かれ、かつ主要な「平番」の戦闘は洮州城の外で行われている。「洮番の事情」に鑑み、石茂華は固原に着任してから直ちに「將校や官吏に空言で物事をごまかさず、実効をあげるよう求めた」。この間、

「階州の守備範延武は、軍門の約束を奉じ、敢えて軍の食糧を着服せず、ひとり、軍規が久しく行われず、兵の数も足りないなどということはないが、万暦二年二月二日に、官軍の内情をよく知る山峒峪の番族頭領磔儿狗儿(ディールクル)がこっそり千哈(チェンハ)等の部族に呼びかけて木竹坪へ略奪に行った。範延武は敵の数が多くないと見て、兵を十分に整えず、急ぎ六〇里離れた木竹坪へ戦いに赴いた。その部下崔繼元ら二〇人足らずの小隊は、深く賊中に入り、番族が崖と森に設けた罠にはまって包囲された。最終的に、官軍はやむなく窮余の策を講じてやっと逃げだした。將校は無事だったが、兵に死傷者が出た。当時、軍門石茂華らは千二、三百里離れたところにおいて、詳しい情報入手できなかったが、斥候からの報告を受け、厳しく調べよう求めた。また巡按宋公が、劉大経などが番族に「しばしば略奪されている」ことを聞き、河州參將の陳堂に訴えた。陳堂は、「これは洮州の番族だ。こちらになんの関係があるのか」と回答した。洮州參將の劉世英は、洮州の域内には番族の略奪に関する報告がないといい、それぞれ信じるところが違うので、相談はできないとした。これにより河州と洮州の參將二人の間にいざこざが生じ、またほかの訴えも絶えなかつた。

万暦二年春の二月、皇帝の「方法を講じて退治し、地方を平定せよ」という指示を受けて、石茂華は「略奪を働く部族を調査するよう厳しく求め」、「無罪の人をみだりに巻き添えにしないように」要求した。まずは略奪の首謀者を差し出して家畜を賠償すれば、戦いはせず、さもなければ兵を出して討伐するという通達を伝達させた。この時、劉伯燮は分守隴右參議から固原兵備へ昇進した。石茂華はさらに洮州と河州の二人の參將劉世英・陳堂にも協力するように論じた。蘭州參將徐勲・岷州守備朱憲・旧洮州操守史経の各部隊がそろつたころ、四月十一日になって、官軍は下沙麻(シャサマ)などの部族から、略奪された家畜、羊一六

○頭・馬七頭・牛三八頭を得た。しかし番族の頭領古六(グーロ)は古巢に帰ったあと、略奪の首謀者を捕まえてこない。これをみて陳堂は兵を率いて、夜、開家寺に宿泊した。劉世英はグーロが帰ったことを知り、陳堂の部隊も迫ってきたのを見て、楊臻・張演と相談してシャーサマ部族の頭目を捕獲しようとした。この際、臨鞏道と蘭州參將徐勳がすべて臨洮に集まったと聞いた劉伯燮は、ほかの部隊と合流して戦うために、さらに斥候を出し、一八日の深夜に番族に奇襲をかけると決めた。鶏がいまだ鳴かず、番族がいまだ眠っている時、大軍が突然現われ、前後に放火した。「一族は驚いて泣き」、腕力のある者は手向かったが、官軍に殺された。この戦では三〇人の首を切り、老弱男女および牛馬の焼け死んだものは数え切れなかった。しかし撤兵する前に、陳堂は昔の恨みを思い出し、かつ自分の六〇〇人の精鋭部隊と号するものは、実際には三〇〇人しかおらず、斬った首も一つしかないで、功績が少なく名譽が得られないのに対し、劉世英と楊臻らが率いた官軍は一五〇〇人、朱憲が率いた官軍は五〇〇人、史経が率いた官軍は三〇〇人で、勝ち取った功績は陳堂より多いことに思い至った。そこでまだ撤兵の信号が出されないのに先に撤退し始めた。この時、朱憲・史経の部隊は、陳堂の部隊が撤兵したのを知らずに、首を捜しに集落に入っていた。山に潜んでいた隣の番族は、虚をついて、朱憲と史経の部隊を包囲攻撃した。朱憲・史経は包囲されたさい、自ら数名の番族兵を殺し、敵を罵倒し、最後に矢がなくなり殺された。本来は大きな勝利を取めたはずの戦役は、官軍同士の不和で二人の將校を失うことになってしまった。万曆帝はこれを聞いて大いに驚き、「機を見て行動し、必ず地方を平定せよ」と責めてきた。石茂華も痛烈な打撃をもって威厳を示さなければ、番族の騷擾を平定できないと考えた。けれども、番族の集落は高い崖や、樹木が生え茂る場所にあるので、十万の軍隊でも手が出せない。しかも一

旦出兵すれば、番族は前もってこれを知り、防備ができてしまう。それで石茂華は、まず帰順するよう説得すべきだと考えた。しかし番族は地形が険しいことを好み、「賞与をもらってもこれを恩義とせず、金品をもらいにきたと思えば、すぐに略奪に出かけた」。劉伯燮は「これを誘い出して殺す」構想を提示し、総督に認められた。五月一三日前後、階州守備範撫は部隊を率いて番族の拠点である山峒峪・栗子莊・夏後頭などから引き上げた。一五日目になって、各番族は官軍がすでに撤兵したと思い、大人数で西関の市にだれだれ込み、略奪をしたうえ、張雷と、楊恕の妻王氏など軍人・民を殺した。これは現地の軍人と民の怒りを引き起こした。劉伯燮は軍令を出して、官軍を集合させて侵犯者を殺し、陣地を守りながら戦った。石茂華は陝西総兵孫國臣・標下游擊張京などに転任を命じて、劉世英らと合流させ、それぞれの所轄の兵、計五千人余を引率して討伐にいかせた。このなかでは総兵孫國臣の率いる固原軍が特にたくましく、直に山峒峪の前に進入した。劉伯燮の部隊は、黃鹿寨の外で彼らとお互いの存在を認めあった。同時に、文県守備馬繩武の部隊に命じて、文県の簡道を通って二王家山に入り、文県の四部族を討伐し、二〇〇年以上の間、のぼったことのない番族の巢窟に入らせた。この戦では、大軍が四方から包囲して攻撃し、首をあわせて二二三切った。矢砲に当たって死んだ者もあるが、山が険しいのでその首を探せなかった。焼け死んだ者は数え切れない。この戦により、山峒峪・栗子莊の二部族は徹底的に焼かれて消滅し、残りの人々は山の森に逃げ込んだ。これに対して官軍は死亡者4人、重傷を負ったのは三〇人以下であった。完勝といつてよい成果で、洮州で將校が殺された恥をすぐとができた。

以上の過程は、瞿宜顛が引用した『明史・西域伝』が記す主な内容である。劉伯燮の『平番紀事』ほど詳しくないが、事件の発生を万曆三年

に推定できた根拠であった。『明史・西域伝』では、戦はこれで一件落着であるが、劉伯燮の『平番紀事』には続きがある。

五月の包圍討伐のあと、各番族はともにスーラ・ザーゾタ部族のところに撤退し、巴舍哈(バーシエハ)・曾卜結(ゼンブジエ)などと連合し、まもなく各地でまた略奪などを始めた。洮州参将事都司楊繼芳・旧洮州操守洪恩などは昼夜状況を探り、動向を把握した。現地は寒さが厳しいので、八、九月ごろ裸麦や豆が熟するころになると、番族の人たちは必ず取り入れに帰るだろうと考え、八月のうちに、石茂華は総兵孫国臣・蘭州参将董大衆・固原東西游擊李東暘・陳守義に転任・討伐を命じた。劉伯燮は先頭となり、鞏昌衛經歷龔效成・典史張弾にそれぞれ要害を守らせ、総兵孫国臣と秀石関で合流したうえ、必勝を誓う儀式を行った。画面にある「総兵大營」という標題が書かれたところが「必勝を誓う儀式」の行われた会場ではないだろうか。

九月一日、洮州より出兵し、一六日、番族の集落に入り、包圍して殲滅した。董大衆・李東暘・朱清など二千余人は南西にまわってスーラとサンドなどの部族を攻撃した。陳守義・楊繼芳・洪恩など二千余人は西に向かってザーゾタとロボなどの部族を襲い、総兵孫国臣は一人、千人を率いてバーシエハ部族の山頂に駐屯し、両方を応援した。劉伯燮は岷州守備徐文顯とともに三百人をつれて旧洮州城外の西南山頂に駐屯した。このとき討伐された番族は「グアンロ族」を除いて、すべて標題に記されている。ここから「平番得勝図卷」にある「入族圍殺」の段は九月一日の戦を描いたといつてよいだろう。

戦いの際には「殺気が空を遮り、南西へ横切り、紫気が辰時から申時まで散らず、二〇里にわたった」。「官軍が協力して戦い、あわせて首を一四一切り、焼け死んだものは九〇〇あまり、器物は数え切れず、犏牛・番馬は数十群を捕獲し、番族の家は空になった」。「七一部族が次

ら次へと白旗をかがげて降伏してきた」。「再び騒乱を起こさないと称した」。この記述は『明史・西域伝』にある「斬首一四〇余、焼け死んだ者は九〇〇余人」および「來降者七一族」との記述にもびつたり合っている。

この戦いのあと石茂華は、番族は痛手を負ったが、現地の官軍は長い間弱体が続いていたので、番族は必ず巻き返してくるだろうと考えた。そこで家来を三〇〇名残して守衛に当たらせ、「巡撫の董公とともに將來のことを一心に考えて、守備を参將に昇格させ、その権を重くし、軍隊の食糧を充実させ、城砦の修繕を行い、崖を取り除いて関所を構築した。往來を禁じ、伐木・採集に関する規定を制定した。すべてが整えられ、声望は鳴り響いた」。丙子年の正月二六日にいたってはじめて、劉伯燮が凱旋した。二月一四日以降、臨鞏参將張憲と、洮州・河州の参將二人は、規律を正そうと、みずから峠に赴き、番族に首謀者を出すように迫った。このとき、番族は、まず四人の首を切つて差し出し、さらに馬・牛・羊などを献上し、「それぞれの地方をまもり、互いに永遠に侵犯しない」と約束した。洮州における番族の騷擾はこれで完全に平定されたのである。六月二六日、階州と文州の番族が、山林のなかできこりをさらつたと、歩哨から報告があった。参將趙憲副と游擊師範は中軍百戸を率いて、栗子莊の集落に到つて放火、包圍殲滅し、四〇人の首を切つた。孟孝臣、王之土はまた、高所に陣取つて下を見おろし、応援にきた夏後頭等の番族を射殺した。番族はひざまずいて降伏した。このほか、阿木(アム)族の王倉節とその頭目挑牙が降伏し、軍門の役所へ行って夷族のコントロールに尽力したいと願つた。水溝の番族、七麻など趙家坪に住む番族、木列など禄嶺に住む番族や古酋などは積極的に穀物を貢納しようとした。アム族は兵二〇名を差し出そうと申し出た。山峒峪・駱駝塩・麦纏坪・二王家山・文県四族と討伐しきれなかった栗子

莊などの一五番族は、みな続々と降伏してきて、軍隊の召集に応じ、食糧を取めると約束した。「甲戌の冬から丙子の冬にいたるまで、巡撫が三度交代し、都司・道台・參將・守備も再三変更された。終始このことにあたったのは軍門である石恭襄及び孫総兵のみである」。

七、『平番得勝図巻』と『平番紀事』の関連性

画面中に標題があることにより、『平番得勝図巻』を解説するうえで、明確な根拠が生まれた。ここから、図巻と、劉伯燮の著した『平番紀事』とはどのような関係にあるのかという問題も出てくる。

劉伯燮、号は小鶴、湖広孝感の人。兄の大鶴と一緒に郷試で合格し、戊辰年に進士となった。万曆三年に參議の身分で隴右を守った。己に厳しく、出費を節約し、部下を束ね、民を利した。数ヶ月のうちには氣風を正し、面目を一変した。人材の選出について熟慮し、二人を選んで、自ら講義と試験を行い、寒いときも暑いときも休むことがなかった。文廟に参り、その制度が正しくないことに気づいて、建て直しに尽力したところ、科挙に受かる人が多く出た。また城廓・塹壕と樓櫓・器具など、軍備の長年廃れていたものを、きちんと整え一新した²⁷⁾。

『平番紀事』にある「帝が策を講じて退治し、地方を平定せよと命令した」という記録のあと、乙亥年の春二月、劉伯燮は「分守隴右參議から固原兵備に昇進」し、軍門である石茂華の優れた補佐官として、直接戦闘に参加したばかりでなく、策士としても働いた。『平番紀事』の記述は、『明史・西域伝』以下、『鞏昌府志』『固原州志』などと符合している。これにより、『平番紀事』と『明史・西域伝』及び関連の地方志との関係はいかなるものかという問題も出てくる。

『明史』の編纂は六〇年間にわたる事業であった。清康熙一八年（一

六七九）より、徐元文を監修として『明史』を編纂し始めたときも、平番の戦いが終了した明万曆四年（一五七六）との間には百年以上の時間がある。『明史・西域伝』の平番に関する記事は、何に基づいて書かれたのだろうか。諸資料からみれば、これは劉伯燮の『平番紀事』を底本にしたことが明らかである。関連する地方志はみな、事件に多少触れているだけで、まとまった記述はなく、細かい情報はない。『明史・西域伝』のなかの平番に関する記述は、編纂官たちが『平番紀事』を根拠にこれを縮めて書いたものである。しかもこれは、平番という歴史的事件について簡単な因果関係のみを記しただけで、最後の戦いまで完全に記述することはせず、さらに最後の戦いに関するデータを、それより前の主要な戦につけてしまった。こうしてみると、編纂官の史料選別に問題があったようである。また編纂官は、事件を万曆二年のあとに置いたが、叙述を整える際に、具体的な時期を省略してしまったので、事件のあらすじは明白であるが、要となる事件がそれぞれおこった時期が不明になってしまった。

『平番紀事』の記述によると、万曆三年四月十一日の戦いに際して「石公は、洮州・河州の二人の參將劉世英・陳堂に、協力することに当たるよう諭し、蘭州參將徐勳・岷州守備朱憲・旧洮州操守史経らの部隊が近くに來るに及び、楊臻らが合流するのを待って、草地に宿営していたグーロ兄弟を追撃させた」。標題には「向導指揮楊臻」「原任參將徐勳攻破」とある。五月一三日前後、「石公は、陝西總兵孫國臣、標下游擊張京などに転任を命じて、劉世英たちに合流させ、それぞれ所轄の合計五千人余りを引率して討伐にいかせた」。「私は黃鹿寨の外で彼らとお互いの存在を認めあった」、「洮州參將事都司楊繼芳・旧洮州操守洪恩などは昼夜状況を探った」。「八月に、石茂華は總兵孫國臣・蘭州參將董大衆・固原東西游擊李東暘・陳守義に転任・討伐を命じた」。「私は先頭と

なり、鞏昌衛に経歴龔效成・典史張弾を分遣して要害を守らせ、総兵孫国臣と秀石関で合流したうえ、必勝を誓う儀式を行うことにした。九月一日、洮州より出兵し、一六日、族の集落に入って包圍殲滅した。「董大衆・李東暘・中軍朱清など二千余人は南西にまわってスーラとサンドなどの部族を攻撃した。陳守義・楊繼芳・洪恩など二千余人は西に向かつてザーツタとロボなどの部族を襲い、総兵孫国臣は一人、千人を率いてパーシエハ部族の山頂に駐屯し、両方を応援した。劉伯燮は岷州守備徐文頭とともに三〇〇人をつれて旧洮州城外の西南山頂に駐屯した」。この記述にある戦のなかで、石茂華（軍門）・劉伯燮・孫国臣・楊繼芳・洪恩・董大衆・李東暘・陳守義・朱清は全員標題に現われている。これより前に触れられた楊臻と徐勳を加えると一人になる。すなわち標題にあった合計一六人のうち、記述されていないのは、原任守備苗永恩・原任都司張九功・原任守備蔣松・原任守備張応祥・原任副総兵種継で、彼らの共通点は「原任」であった。同じ「原任」であった原任参将朱清と原任参将徐勳は『平番紀事』に記載されている。注目したいのは、標題の人名の末尾に、朱清と徐勳については、「攻破」という二字がつけられていることである。ここから一つのルールが明らかになる。つまり具体的な功績のない「原任」は戦の記述に現われない。これは「紀事」の慣例に符合している。それに対して『平番得勝図巻』では逆に、功績のなかった「原任」将校の標題もある。これは図巻の作成目的にかかわることであろう。

『平番紀事』が九月一六日の戦いについて記す、「南西にまわってスーラとサンドなどの部族を攻撃した」「西に向かつてザーツタとロボなどの部族を襲った」ことなどはみな、標題に書かれている。唯一「グアン口族」だけが触れられていない。「総兵一人が千人を率いてパーシエハ部族の山頂に駐屯し、両方を応援した」とあることについては、画面に

は「パーシエハ族番賊」という標題の上方に威風堂々とした「総兵大営」が描かれている（図12）。

『平番紀事』と『平番得勝図巻』との関係は、劉伯燮が『平番紀事』を著す目的からもうかがえる。劉伯燮は平番の過程をつぎのように総括している。「甲戌の冬から丙子の冬にいたるまで、巡撫が三度交代し、都司・道台・参将・守備も再三変更された。終始このことにあたったのは軍門である石恭襄及び孫総兵のみである」。『平番紀事』の中には、「軍門」あるいは「石公」に触れた箇所が合計一四ある。劉伯燮は、軍門石茂華が平番の戦いを組織・指揮した功績に対して十分な敬意を表し、石茂華こそ「終始このことにあたってきた」人物だと見なしていた。「万曆甲戌の春、毅庵石恭襄公茂華が命を受けて総督として陝西にやって来て、真つ先に辺境の将校や官吏に空言で物事をごまかすのを禁じ、実効をあげるよう求めた」という、平番の開始を語る書き方からも劉伯燮の軍門石茂華に対する敬意がわかる。一方『平番得勝図巻』では最初の軍門の出兵から、末尾の軍門によ



図12

る賞功に至るまで、いたるところで軍門である石茂華の容姿や威厳が強調される(図13)。ここからこの図巻が明らかに軍門石茂華を称えることを主要な目的としていたことがわかる。石茂華については、『固原州志』卷三八に、下記の独立した記録があり、「州の士人がこれを称え、名宦祠に入れることを申請した」という記述もある。

石茂華(一五二一—一八三)、字は君采、号は毅庵、明代中期の大臣で、益都(現在の青州)人であった。嘉靖二十三年(一五四四)に進士となり、浚県(現在河南省に属する)の知事に任じられた。時に年わずかに二三歳。訴訟案件を処理し、公正にして明快と称えられた。黄河の氾濫に際しては、自ら工人を率いて堤防の構築に当たった。揚州(現在の揚州市)知府の在任中、倭寇が江淮地域に侵犯したとき、嚴嵩の義子である趙文華



図13

の妨害を退け、揚州を襲った倭寇を退治した。後に山西按察副使・河南副使・陝西参政・按察使を歴任した。隆慶元年(一五六七)都察院右僉都御史に昇格、巡撫甘肅・山西となった。万曆元年(一五七三)都察院右都御史となり、総督陝西三辺軍務となった。この間、数回にわたって内外の騷擾を平定し、朝廷から褒奨をうけた。ついで兵部尚書・掌南京都察院事となった。陝西・甘肅地区を巡察した際、現地の大飢饉に会い、朝廷に役務や税金の免除を申請し、倉庫の備蓄を出して救済にあたった。過労によって病となり、血を吐いて死んだ。太子少保を贈られ、「恭襄」の諡を賜った。

以上、『平番紀事』と『平番得勝図巻』の両者は、同じ目的と、同じ主要な賞賛する対象を有していると言えよう。もちろん「伝記は事実を述べられるが、その容姿は載せられない。詩文は美しさを詠むことができるが、その形象は備えられない。図画をつくれば、これを兼ねられる」⁽²⁸⁾「物を宣伝するに、文章より長けているものはなく、形を残すに、⁽²⁹⁾絵画より優れているものはない」と言われるように、文章と絵画とでは、基本原則が異なるから、互いの内容の完全な一致は不可能である。その差は、画家の構想と絵画表現の限界性によっても生まれる。それゆえ、同じ時期に起きた同一の事件について、『平番紀事』は、事件の由来や過程を重視し、戦功や、拿捕の内容と過程を具体的に詳しく記述した。それに対して『平番得勝図巻』は、簡略にして総括的であり、その歴史過程にあった豊かで多種多様な細部のイメージを提供し、関連する城の形状や山川、橋をもできる限り描き出して、『平番紀事』の不足を補った。目標は同じであるが、手法はそれぞれに異なっており、それぞれの長所がよくあらわれていると言えよう。

あるいはこのように推測することもできる。絵師は「平番得勝図巻」の製作にあたり、『平番紀事』を参照し、注文者の別の要求に応じて新

たなアレンジも加え、絵画のルールに合致した構想や画面のセッティングをした、と。

〔注〕

- (1) 陳履生「紀功与記事・明人」『抗倭図巻』研究』（『中国国家博物館刊』二〇一一年第二期）。
- (2) 朱啓鈴（一八七二—一九六四）本籍は貴州開陽、字は桂辛。晩年は虻公を号とし、人々から桂老と呼ばれた。一八七二年に河南省信陽に生まれ、中国营造学社の創始者であった。その一生は清末・北洋政府・民国・日本勢力に支えられた政権・新中国という五つの歴史的な時期にわたった。光緒期の挙人で、一九〇三年に京師大学堂図書館監督を務めたのはじめ、北京城内警察総監・東三省蒙務局督弁・津浦路北段総弁などを歴任した。一九一二年七月より交通部総長、一九一三年八月に代理國務總理、しばらくして内務部総長に就任した。一九一四年より京都市政督弁を兼ね、一九一九年には南北講和の北方総代表を務めた。講和が決裂してから政界から引退し、天津・上海に移り住んだ。一九二〇年に『四庫全書』の印刷監督を担当した。また中国营造学社を設立し、自ら社長となった。著作に『螻園文存』『存素堂系繡録』『女紅伝徴略』『系繡筆記』『芋香録詩』『清内府刻糸書画考』『清内府刺繡書画考』『漆書』等がある。
- (3) 張新梧は不詳。二〇一〇年、北京匡時競売会社が売り出した顔世清（民国）の「秋槎図」（一九二四年）に「範陽張新梧過目之印」があった。
- (4) 瞿宜顯（一八九四—一九七三）（一説は一八九二—一九六八）、別名は益錯、字は兌之、略してサインするときは「兌」の一字にした。号は鉢庵で、晩年には蛻廠、蛻園と号した。本籍は湖南省善化（今長沙市）であった。清末の軍機大臣瞿鴻禨の子で、上海の復旦大学を卒業した。若年より北洋政府國務院秘書・国史編纂処処長・印鑄局局長・湖北省政府秘書長などを歴任した。後に南開大学・燕京大学・清華大学・輔仁大学で教鞭をとった。著作に『漢代風俗制度史前編』『漢魏六朝賦選』『北平建置談叢』『北平史表長編』『同光間燕都掌故輯略』『中国社会史料叢鈔』『方

志考稿甲集』『長沙瞿氏叢刊』『補書堂討録』等がある。

- (5) 李文忠（一三三九—一八四）泗州盱眙の人、明太祖朱元璋の甥で、一九才より軍隊を率いて戦闘に参加し、戦功を重ね、朱元璋の主要な優れた將軍の一人であった。没後、岐陽王に封じられ、武靖という諡を賜った。太廟・肖像功臣廟に祀られ、ともに第三位に配される。
- (6) 徐世昌（一八五五—一九三九）清末の挙人で進士合格した。袁世凱が小站で軍隊を創設したときよりその策士となり、盟友でもあった。一人は文、一人は武で、互いに志を同じくして歩んだのである。一九〇五年に軍機大臣になった。一九一八年一〇月安徽派によって操られた安福国会で大統領に選出されたが、一九二二年、第一次直奉戦争後に天津に帰った。晩年、元部下や友人の力を借りて二〇余種の著述を完成した。
- (7) 岐陽王李文忠およびその末裔と『平番得勝図巻』との関係を示唆するのは、『明史・列伝第十四』にある下記の記述のみである。「明洪武十二年（一三七九）洮州の十八番族が反乱を起こした。李文忠と西平侯沐英は、ともにこれを平定し、東籠山南川に城を築き、洮州衛を設けた」。
- (8) 秦「秦詔陶量」、高九・二cm、一九六三年鄒城紀王城遺跡出土、山東博物館蔵。
- (9) 春秋「平鐘」、高二六・九cm、一九七五年呂南大店春秋墓出土、山東博物館蔵。
- (10) (漢) 王逸「魯靈光殿賦」。
- (11) (唐) 張彦遠「歷代名画記」。
- (12) (清) 方薰「山静居論画」。
- (13) 二〇〇五年山東長清漢墓出土、五四cm×二四五cm、山東博物館蔵。
- (14) 一九五六年山東肥城梁城出土、七八cm×一四九cm、山東博物館蔵。
- (15) 一九三一年朝鮮平壤出土、朝鮮平壤博物館蔵。『中国美術全集』絵画篇一、一〇三頁。
- (16) 一九六六年山西大同石家寨司馬金龍墓出土、山西省博物院、大同市博物館分蔵。『中国美術全集』絵画篇一、一五三—一六三頁。
- (17) 一九八一年寧夏固原西郊出土、寧夏固原博物館蔵。『中国美術全集』絵画篇一、一六四—一六五頁。

(18) 一九三二年ころ河南洛陽出土、米国ネルソン・アトキンス美術館蔵。

《中国美術全集》絵画篇一、一六八頁。

(19) 一九六〇年南京西善橋出土、南京博物院蔵。『中国美術全集』絵画篇一、一四四頁。

(20) 大英博物館蔵。『中国美術全集』絵画篇一、二二〇頁。

(21) 羅汝敬（一三七二—一四三九）名は簡、字も簡で通用。江西省吉水県盤谷鎮の出身。明代初期朝廷の重臣羅復仁の孫で、一四〇四年に進士となり、庶吉士・翰林侍講・監察御史・工部右侍郎などを歴任した。

(22) 王瓊（一四五九—一五三二）明朝の軍事に関わった人物。成化・弘治・正徳・嘉靖の四代皇帝の下で、工部主事という六品官より、戸部・兵部・吏部尚書という一品官まで昇進した。その一生に三つの大きな仕事を成し遂げたことで讃えられる。一は漕河の治水、二は宸濠の叛乱の平定、三は西北における辺境警備の総指揮者を勤めたことである。これにより、于謙・張居正とともに明代の三重臣と称される。

(23) 劉希稷、本籍は江蘇省常州。正徳辛巳の進士。戸部主事を命ぜられたのちに任官中に死亡した。

(24) 北京図書館古籍出版編集部『北京図書館古籍珍本叢刊一一 史部・雜史類 建文朝野匯編・建文書法擬・名臣寧攘要編・夷俗記・遼事述』書目文獻出版社、一九八九年。

(25) 『固原州志』卷三「東岳廟は城の東から三里ぐらい離れたところにある」。

(26) 前掲劉伯燮『平番紀事』。以下出典を明記しないところはすべてこれによる。

(27) 『鞏昌府志』卷二二。

(28) 張彥遠「歴代名画記」

(29) (晋) 陸機「士衡論画」

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」（課題番号23242039）研究代表者…保谷徹の一環として、その経費の一部も使用して行なった。

（翻訳…黄栄光）